

平城京左京四条三坊十三坪

平成19年度発掘調査報告書

2009

(財) 元興寺文化財研究所

序

現在、奈良は 2010 年開催予定の平城遷都 1300 年祭で盛り上がっています。そのような意味でも、奈良の寺院や平城京は、全国的に改めて注目されています。

今回、調査いたしました奈良市三条桧町の一角は、奈良時代の平城京四条三坊十三坪に相当する場所です。近年、発掘調査によってこの辺りが奈良時代にどのような開発が行われて、どのような景観であったかがわかってきてています。

今回の調査でも、弥生時代の方形周溝墓が、平城京造営の際に壊されていたことが判明しました。こうした遺構の存在は、奈良の土地が、平城京が遷都してくる前にどのような状況であったかを知る手がかりとなるでしょう。遷都前後の奈良の変貌を、想像してみることも大切であり、楽しいのではないでしょうか。

平成 21 年 3 月

(財) 元興寺文化財研究所
理事長 辻村泰善

例　言

- 本書は、平城京左京四条三坊十三坪における発掘調査成果をまとめたものである。
- 調査地は、奈良市三条松町400の一部、401-1の一部、402-1の一部で、開発対象面積は2204.84m²、建築面積は1024.34m²、発掘調査面積は約475m²である。
- 調査は、奈良県教育委員会及び奈良市教育委員会から依頼を受けた財元興寺文化財研究所が、平成20年2月12日～3月6日まで現地での作業を実施し、狭川真一・岡本広義・角南聰一郎が担当した。整理及び報告書作成は、調査終了後速やかに開始し、平成20年度をそれに充てた。
- 調査地での実測および写真撮影は、狭川・岡本・角南・坂本亮太がおこない、武田浩子（人文考古学研究室）・小幡千晶（奈良教育大学）・榎真麻（奈良大学）の協力を得た。出土遺物の実測及び浄書は、仲井光代（人文考古学研究室）がおこない、写真撮影は狭川が担当した。調査地の基準点測量は、世界測地系2000を利用した。
- 出土した木製品（柱）の樹種同定は木沢直子（木器保存研究室）が担当した。
- 本書の執筆は、第3章を木沢が担当したほかは、角南が担当し狭川が加筆した。編集は村田裕介の協力を得て角南が担当した。

目　次

第1章　はじめに

(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査体制	3
(3) 周辺の調査	3

第2章　調査の成果

(1) 層序	4
(2) 遺構	4
(3) 出土遺物	11

第3章　平城京左京四条三坊十三坪出土木製品の樹種同定

16

第4章　総　括

18

第1章 はじめに

(1) 調査に至る経緯

平成19年10月、北側吉彦氏ほかから、奈良県教育委員会教育長あてに共同住宅建設に係る、発掘調査の届出が提出された。当該地は、平城京の条坊復元で、左京四条三坊十三坪にあたることから、発掘調査の必要があると判断された(Fig.1)。

同年11月、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会、側元興寺文化財研究所が協議を行った結果、当研究所が受託をすることとなり、当研究所と原因者である北側吉彦氏との間で契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

なお、調査に関する費用は原因者が負担した。同時に重機等機器類や現地作業員の手配についても、原因者が行った。

調査は、平成20年2月12日から開始し、3月6日に埋め戻しを完了し終了した。調査終了後、遺物整理・報告書作成について、別途原因者と当研究所が契約を締結し、速やかに開始した。

発掘調査及び遺物整理・報告書作成については、北側吉彦氏の全面的な支援や協力があり、無事に終了することができた。また、奈良県教育委員会及び奈良市教育委員会から適切な指導を賜った。

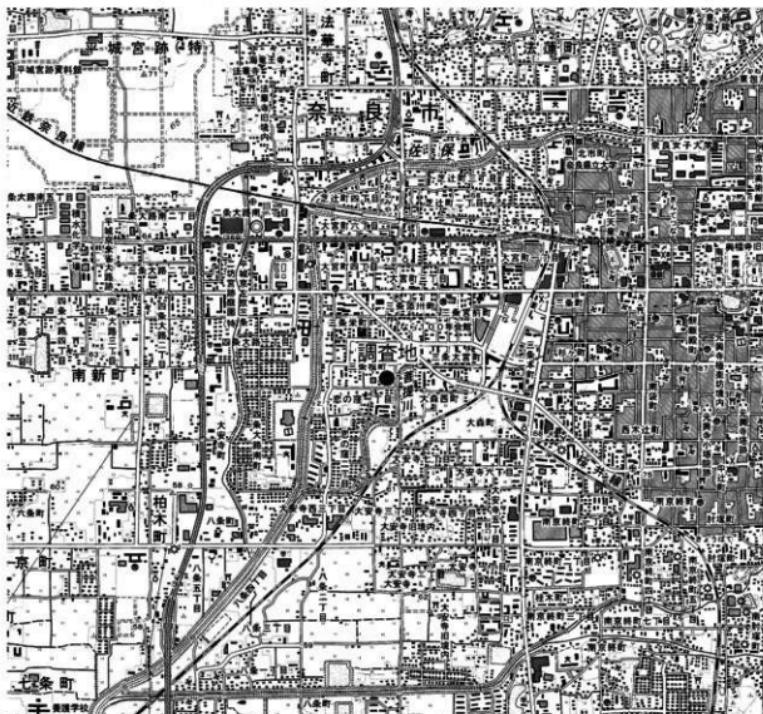


Fig.1 調査地点位置図 (1/25000)

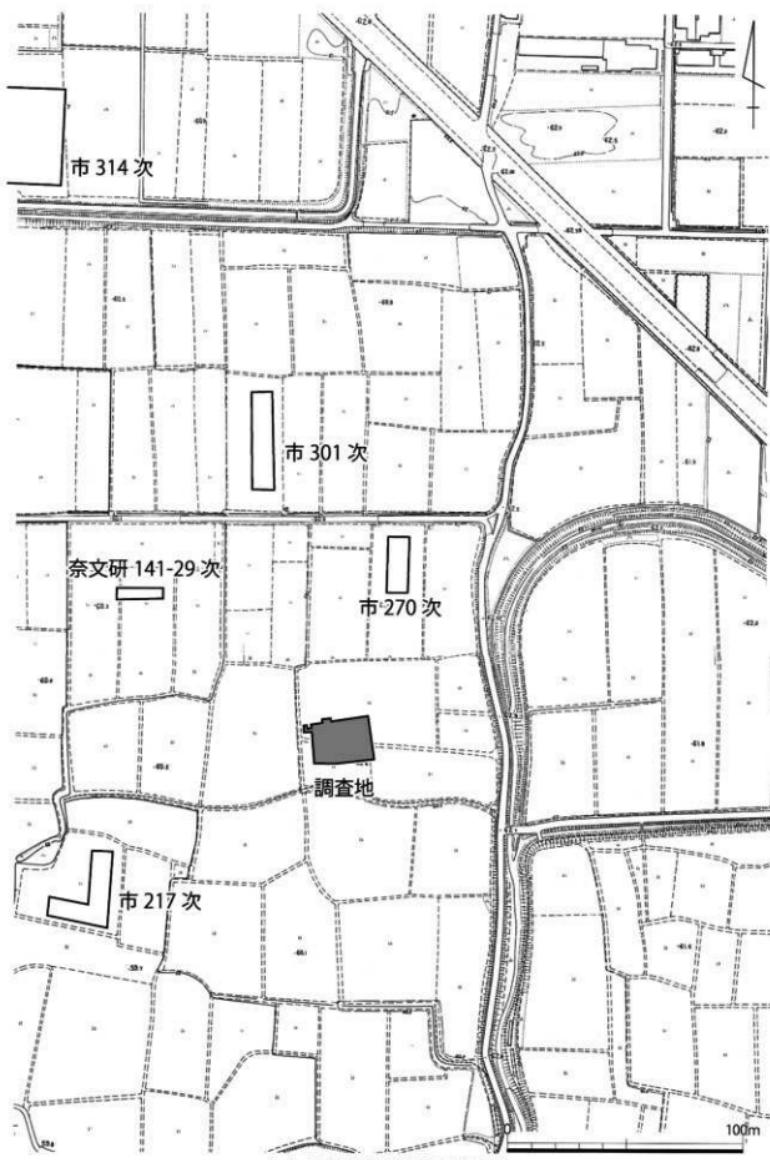


Fig.2 調査地周辺の調査状況 (1/2000)

(2) 調査体制

発掘調査及び遺物整理・報告書作成は以下の体制で実施した。

調査指導：奈良県教育委員会・奈良市教育委員会

調査主体：鶴元興寺文化財研究所

理事長 辻村泰善

所長 塙井清足

事務局長 奥洞二郎

研究部長 狹川真一

人文考古学研究室

室長 伊藤健司

主任研究員 佐藤亞聖・角南聰一郎

研究員 坂本亮太・村田裕介

特任学芸員 岡本広義

現地作業員：株式会社 アイディエイ

調査補助員：武田浩子・仲井光代・奥田智代（人文考古学研究室）、小幡千晶（奈良教育大学）、

樋真麻（奈良大学）

発掘調査及び遺物整理にあたり、多くの方々からご指導・ご助言をいただいた。記して感謝申し上げます。（敬称略）

西藤清秀（奈良県教育委員会）、森下恵介・篠原豊一・久保邦江・森下浩行・鎌方正樹（奈良市教育委員会）

(3) 周辺の調査

当該調査地と同じ左京四条三坊十三坪内では、他に 1 地点で発掘調査が実施されており、奈良時代の掘立柱建物 1 棟が検出されている（立石 1993）。また周辺ではいくつかの発掘調査が実施されている（Fig.2）。左京四条三坊十二坪が昭和57年度に調査されており、奈良時代の掘立柱建物 6 棟が重複して検出されている（奈良国立文化財研究所編 1983）。左京四条三坊十四坪では、奈良時代の掘立柱建物 5 棟、土坑 1 基が検出されている（池田 1995）。更に南の左京五条三坊九坪では、奈良時代以前の河道 1 条、奈良時代の掘立柱建物 1 棟、鎌倉時代の溝 2 条、近世の土坑 1 基が検出されている（篠原・原田 1991）。また、北西の四条三坊十坪では、奈良時代の掘立柱建物 4 棟、塹 2 条、井戸 3 基などが検出されている（松浦 1995）。

【参考文献】

池田裕英 1995「11 平城京左京四条三坊十四坪の調査 第301次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成6年度』奈良市教育委員会 p.66

篠原豊一・原田憲二郎 1991「21 平城京五条三坊九坪の調査 第217次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成2年度』奈良市教育委員会 p.80-81

立石昭志 1993「23 平城京左京四条三坊十三坪の調査 第270次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成4年度』奈良市教育委員会 p.112

松浦六輔美 1995「21 平城京左京四条三坊十坪の調査 第314次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成6年度』奈良市教育委員会 p.88-97

奈良國立文化財研究所編 1983「11 左京四条三坊十二坪の調査 第141-29次」『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』奈良國立文化財研究所 p.55

第2章 調査の成果

調査の結果、調査区のほぼ全面に遺構が存在しており、方形周溝墓、掘立柱建物、柵列、土坑、素掘溝などを検出した。

(1) 層序

調査直前は水田であった。表土下約15~20cmの間は現代の耕土が乗り、その直下に中近世の耕土と考えられる明灰色粘質土が約15~20cm堆積していた。これを除去すると、淡黄灰色粘質土があり、この層にすべての遺構が掘り込まれていた。淡黄灰色粘質土は地山と認識した(Fig.3)。なお、地山と認識した部分のうち調査区の北東部は砂礫層となっている。検出した東西幅約12m、南北幅約6mを測る。深さはトレチを設定して一部0.5m程度掘り下げたがそれより深く、底は未確認である。礫層中から出土遺物は、サヌカイト製の剝片を見出したのみである。

(2) 遺構

方形周溝墓

ST120 (Fig.4・5, Pla.2)

調査区中央北に位置する。周溝のみ残存し、マウンドや主体部は削平のため失われていた。周溝は、四隅が切れた状態で検出されている。溝の埋土観察からは、周溝墓が造られた後にゆっくりと溝が埋没していく様子が観察される。規模は周溝を含んで、東西12.5m、南北12.23m、周溝を除くと、東西11.0m、南北10.0mである。周溝は5つに分割された状態で残存する。北から逆時計回りにa・b・c…と仮称している。周溝aは長さ5.36m、幅0.15m、深さ0.2mである。周溝bは長さ5.0m、幅0.76m、深さ0.19mである。周溝cは長さ5.1m、幅0.11m、深さ0.2mである。周溝dは長さ2.76m、幅0.41m、深さ0.14mである。周溝eは長さ5.1m、幅0.95m、深さ0.07mである。周溝dは南隅で東方向に逆T字状に分岐しており、東側に更にもう1基の方形周溝が存在した可能性がある。溝aから土器が出土し

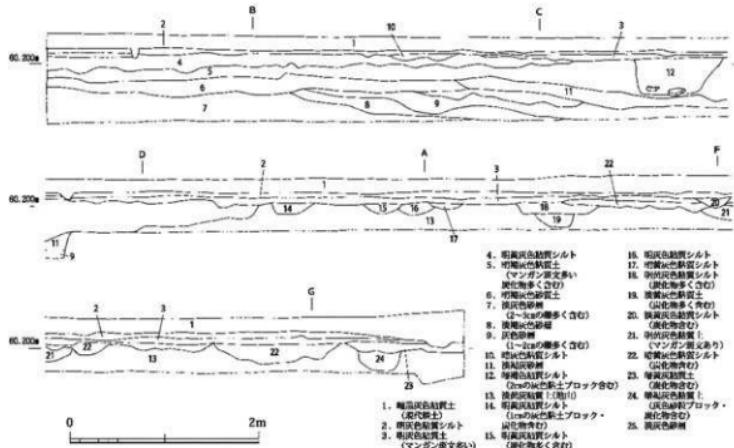


Fig.3 調査区東縁面土層觀察図 (1/50)

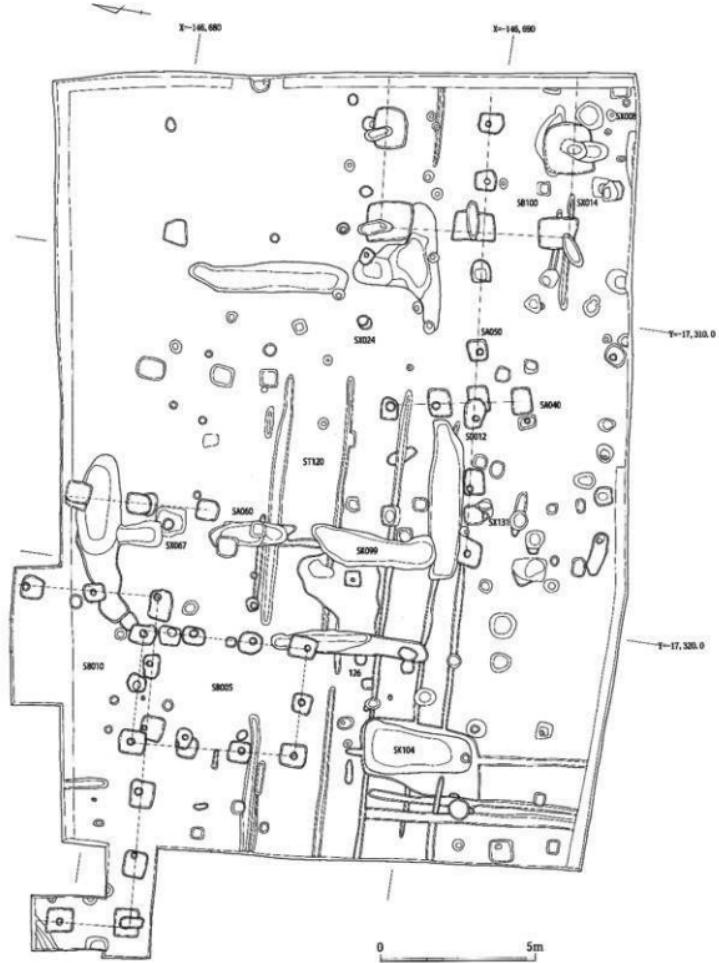


Fig.4 换出構造配置図 (1/150)

ている。出土遺物から弥生時代中期前半と考えられる。

掘立柱建物

SB005 (Fig. 4・6, Pla.2)

調査区北西に位置し、桁行3間(5.45m)、梁行2間(3.62m)の南北棟建物である。建物の主軸方位は、N-3°40' -Wである。柱掘方は隅丸方形で、一辺0.58~0.78m、検出面からの深さ0.23~0.38mである。柱掘方は北西隅から時計回りにa・b・c…と仮称している。柱掘方aはSB010を、柱掘方c～fはST120西周溝を切っている。土層観察から柱の太さは、aが22cm、bが20cm、cが26cm、dが22cm、eが21cm、fが20cm、gが23cm、hが25cm、iが22cmである。柱の抜き取り痕跡は認められなかった。出土遺物は、奈良時代前半～中頃のものである。

SB010 (Fig. 4・7, Pla.2)

調査区北西に位置する、桁行2間(4.34m)以上、梁行5間(10.64m)の東西棟建物である。建物の主軸方位は、N-2°40' -Wである。柱掘方は隅丸方形で、一辺0.71~0.92m、検出面からの深さ0.29~0.49mである。北辺は調査区外であったため検出されていない。掘方は北東隅から時計回りにa・b・

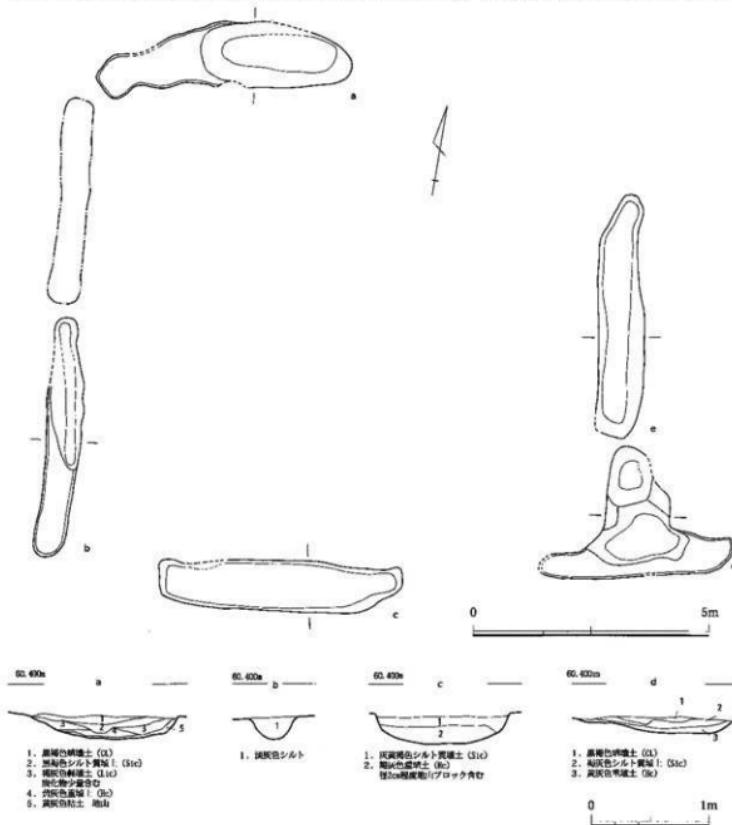


Fig.5 ST120 実測図 (1/100) 土層辨索図 (1/40)

c…と仮称している。当初、調査区内からは、柱掘方 b ~ g までが検出されたが、建物のプランを確認するため、柱掘方 b の北側と柱掘方 g の西側を拡張した結果、桁行 2 間以上、梁行 5 間であることが確認された。柱掘方 c 及び f には柱根が一部残存していた。柱掘方 h のみ柱の抜き取りが認められる。抜き取り痕は長方形を呈し、東西 0.53m、南北 0.76m、深さ 0.09m である。柱掘方 b のみ極端に浅い。柱

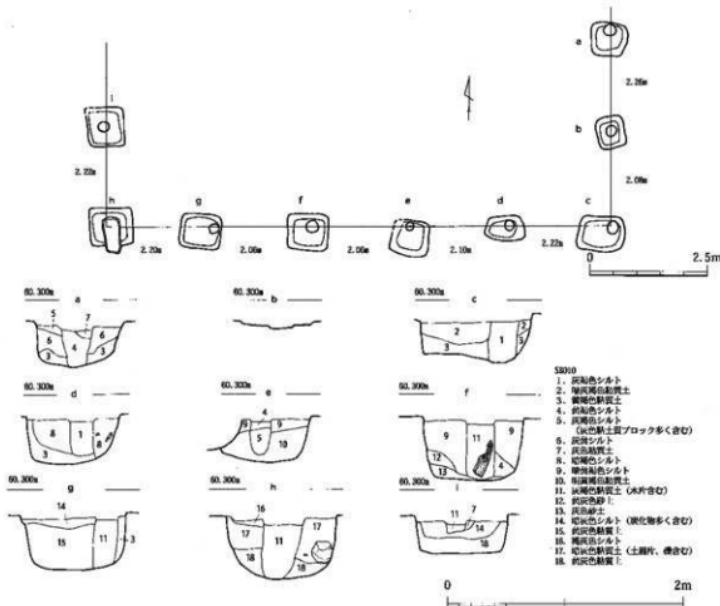
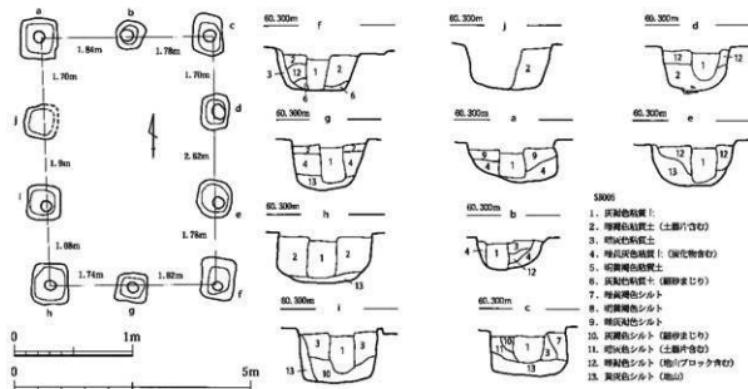


Fig.7 S8010 実測図 (1/100) 土層観察図 (1/40)

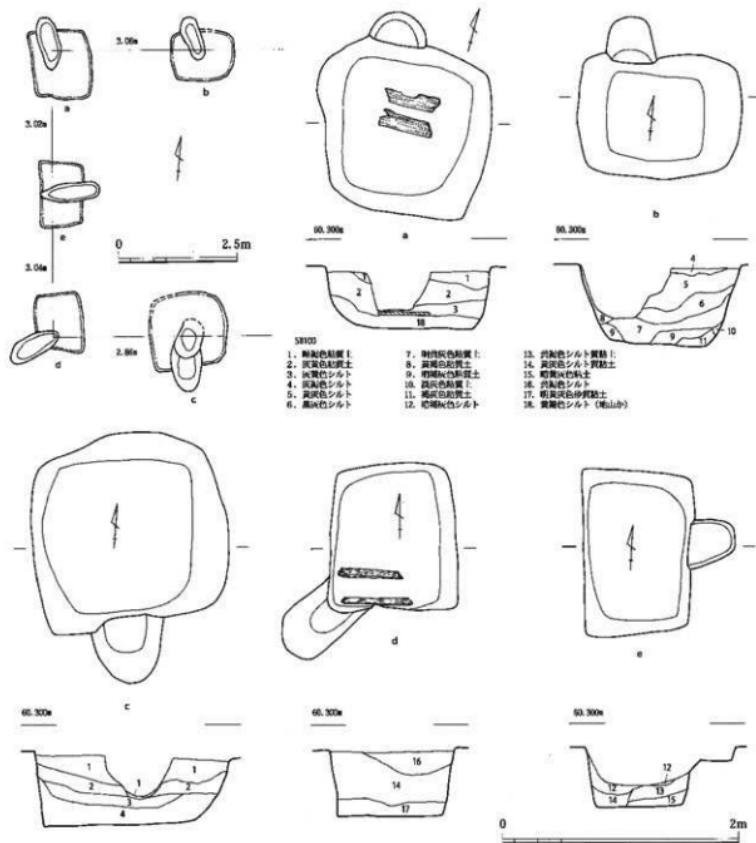


Fig.8 SB100 実測図 (1/100) 及び柱掘方土層観察図 (1/40)

の太さは、a が 28cm、c が 24cm、d が 22cm、e が 18cm、f が 24cm、g が 22cm、i が 16cm である。樹種同定の結果、柱掘方 c 柱根はヒノキ、柱掘方 f 柱根はヒノキ亜科であることがわかった（第3章参照）。

SB100 (Fig. 4・8, Pla.3)

調査区南東に位置する、桁行 2 間 (6.06m)、梁行 1 間 (3.06m) 以上の東西棟建物である。建物の主軸方位は、N-6°40' -W である。柱掘方は隅丸方形で、一辺 1.05~1.65m、検出面からの深さ 0.48~0.55m である。東部分は調査区外であったため検出されていない。掘方は北西隅から時計回りに a・b・c…と仮称している。いずれの掘方も、柱の抜き取り痕が認められる。抜き取り痕の規模は、長さ 0.28~0.7m、幅 0.42~0.62m、深さ 0.2~0.39m である。柱掘方 a 及び柱掘方 d には礎板が、2 本並行して置かれた状態で残存していた。樹種同定の結果、柱掘方 a 矩板はヒノキ亜科であることがわかった（第

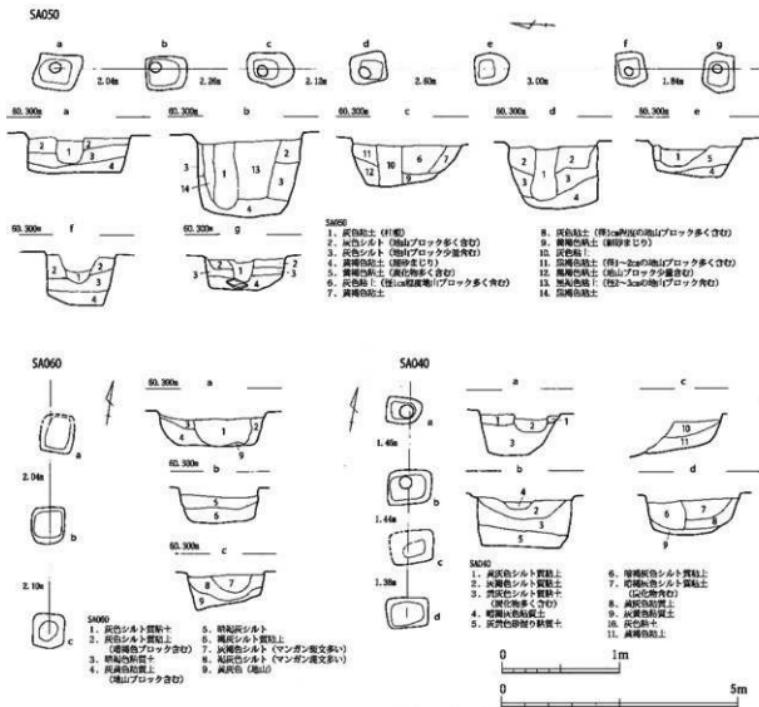


Fig.9 SA040・SA050・SA060 実測図 (1/100) 土層観察図 (1/40)

3章参照)。

柱の抜き取り方向は、北側柱列は北側へ、南側柱列はおおむね南側へ、掘方eのみ東へ倒して抜き取っている。建物の上部構造を解体した後に最終的に柱を抜き取った様子が窺える。

柱列

SA040 (Fig. 4・9、Pla.1)

調査区南に位置する、南北方向の柱列である。主軸方位は、N-11°10' -Wである。検出長は3間分(4.28m)で、柱掘方は隅丸方形を呈し、一辺0.68~0.79cm、検出面からの深さ0.29~0.39mである。掘方は北から南に a・b・c…と仮称している。a・bには柱痕が認められた。柱の太さは、aが30cm、bが22cmである。

SA050 (Fig. 4・9、Pla.1)

調査区南に位置する、東西方向の柱列である。主軸方位は、N-84°30' -Eである。検出長は6間分(13.86m)で、柱掘方は隅丸方形を呈し、一辺0.58~0.87m、検出面からの深さ0.26~0.63mである。掘方は西から東に a・b・c…と仮称している。eを除いて柱痕が認められた。柱の太さは、aが24cm、bが22cm、cが20cm、dが24cm、fが20cm、gが22cmである。掘方cは柵列SA070を切っている。

SA060 (Fig.4・9、Pla.1)

調査区中央北に位置する、南北方向の柱列である。主軸方位は、N-2°10' -Wである。検出長は2間

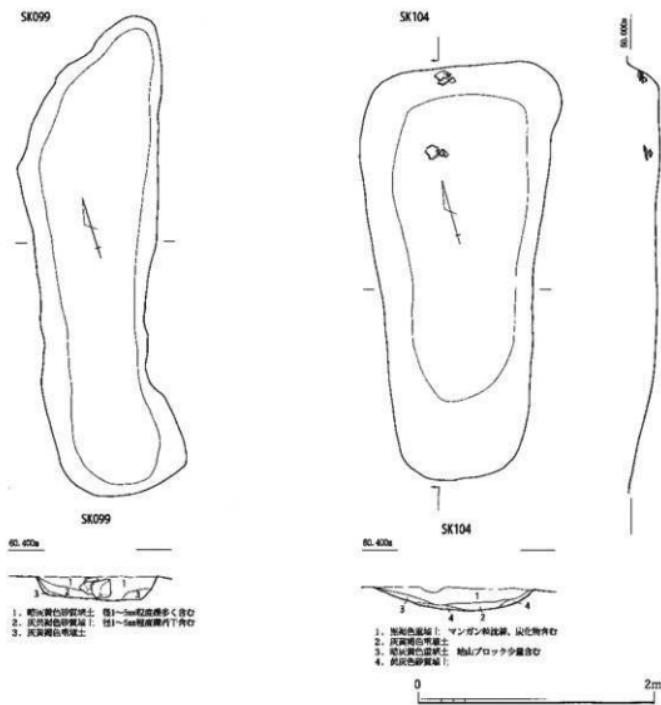


Fig.10 SK099・104 平面図・土層観察図 (1/40)

分(4.14m)で、柱掘方は隅丸方形を呈し、一辺0.64~0.87m、検出面からの深さ0.22~0.27mである。掘方は北から南にa・b・cと仮称している。柱痕は認められなかった。掘方aはST120北周溝を切っている。

土坑

SK099 (Fig. 4・10, Pla.1)

調査区中央で検出した、軸線を南北方向にとる不定形の土坑である。東西1.08m、南北4.04m、深さ0.2mである。遺構内からは多量の遺物が出土した。遺物の中でも特異なのは、溶着した瓦で、瓦窯の溶壁と考えられるものである。出土遺物から本遺構の時期は奈良時代後半と考えられる。

SK104 (Fig. 4・10, Pla.1)

調査区西で検出した、軸線を南北方向にとる隅丸長方形の土坑である。東西1.67m、南北3.47m、深さ0.19mである。遺構内からは弥生土器が出土したのみである。出土遺物から、本遺構の帰属時期は、弥生時代中期前半と考えられ、周溝墓との関連を窺わせる。

溝

SD102 (Fig. 4・18, Pla.1)

調査区中央付近で検出された、東西方向の素堀溝である。長さ170cm、幅25cm、深さ5cmである。

その他の遺構

SX006 (Fig.4、Pla.1)

調査区北で検出した、方形の柱穴状遺構である。東西64cm、南北65cm、深さ23cmである。奈良時代の須恵器・土師器が出土した。

SX014 (Fig.4、Pla.1)

調査区南東隅で検出した、方形の柱穴状遺構である。柱穴状遺構 SX006に切られ大半は失われている。東西84cm、深さ 7 cm である。

SX059 (Fig.4、Pla.1)

調査区北で検出した、方形の柱穴状遺構である。東西83cm、南北148cm、深さ 15cm である。奈良時代の須恵器・土師器が出土した。

SX067 (Fig.4、Pla.1)

調査区北で検出した、方形の柱穴状遺構である。柱穴状遺構 SX059に切られる。東西95cm、南北97cm、深さ35cmである。

SX008 (Fig.4、Pla.1)

調査区南東隅で検出した、ピットである。円形を呈し、直径26cm、深さ10cmである。

SX024 (Fig.4、Pla.1)

調査区中央付近で検出した、ピットである。円形を呈し、直径45cm、深さ 9 cm である。

SX126 (Fig.4、Pla.1)

調査区西付近で検出した、ピットである。円形を呈し、直径42cm、深さ 9 cm である。

SX131 (Fig.4、Pla.1)

調査区中央南で検出した、ピットである。素縁溝に切られ上面を削平されている。円形を呈し、直径58cm、深さ37cmである。

(3) 出土遺物

ST120出土遺物 (Fig.11、Pla.4)

弥生土器

壺 (2) 底部のみ残存し、底径8.4cmである。外面には工具痕が認められる。

壺 (1) 底部のみ残存し、底径5.8cmである。外面は粗いハケ調整をし、底部内面には指頭圧痕が残る。いずれも弥生時代中期前半と考えられる。

SB005出土遺物 (Fig.12、Pla.4)

須恵器

壺 (3・5) 3は口縁部のみ残存するが、細片のため口径復元は困難である。内外面とも回転ナデを施す。柱掘方 a 出土。5は底部のみ残存する。底径10.0cmで底部に高台を貼り付ける。

杯蓋 (4) 口縁部から天井部にかけて残存するが、細片のため口径復元は困難である。杯Bの蓋と考えられる。天井部外面は左回りに回転ヘラケズリ、口縁部内外面は回転ナデを施す。柱掘方 a 出土。

杯身 (6) 口縁部から底部が残存する。口径13.6cm、器高3.0cmである。底部外面は回転ヘラケズリの後にナデを施す。杯Aである。柱掘方 e 出土。

土師器

皿 (1) 皿としたが細片のため、杯の可能性もある。底部に指頭圧痕が認められる。柱掘方 c 出土。

碗 (2) 口縁部のみ残存するが、細片のため口径復元は困難である。

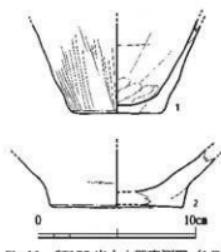


Fig.11 ST120出土土器実測図 (1/3)

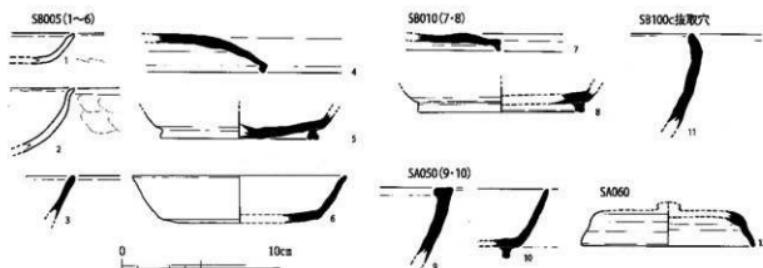


Fig.12 掘立柱遺構関係出土器実測図 (1/3)

外面はケズリ後にナデを施す。柱掘方 a 出土。

SB010出土遺物 (Fig.12, Pla.4)

須恵器

杯蓋 (7) 口縁部のみ残存するが、細片のため口径復元は困難である。杯 B の蓋と考えられる。口縁部内外面は回転ナデを施す。柱掘方 a 出土。

杯 (8) 底部のみの細片で底径10.6cmである。底部外面に回転ヘラケズリの後に高台を貼り付けナデを施す。杯 B である。柱掘方 d 出土。

SB100出土遺物 (Fig.12・13, Pla.4)

須恵器

鉢 (11) 口縁部のみの細片である。口縁端部は内傾し内外面とも回転ナデを施す。鉢 A。柱 c 抜取穴出土。

木製品

礎板 (1・2) 1 は長さ62.0cm、幅9.1cm、厚さ5.3cmで、2 は長さ61.3cm、幅8cm、厚さ6.7cmで、いずれも柱掘方 d 出土で、両端部及び裏面は腐食及び欠損する。針葉樹である。

SA050出土遺物 (Fig.12, Pla.5)

須恵器

鉢 (9) 口縁部のみの細片である。口縁端部は肥厚し面を持つ。内外面ともに回転ナデを施す。柱掘方 a 出土。

杯 (10) 口縁から底部にかけての細片で、器高4.4cmである。内外面とも回転ナデを施し、高台を貼り付ける。杯 B。柱掘方 a 出土。

SA060出土遺物 (Fig.12)

須恵器

蓋 (12) 口縁部のみ残存し、口径10.9cmである。恐らくは天井部に宝珠形のつまみが付けられていたと考えられる。口縁部は強い回転ナデを施す。柱掘方 b 出土。

SK099 (Fig.14, Pla.5・6)

須恵器

蓋 (9・10) 9 は口径11.8cm、器高2.1cmで、天井部外面

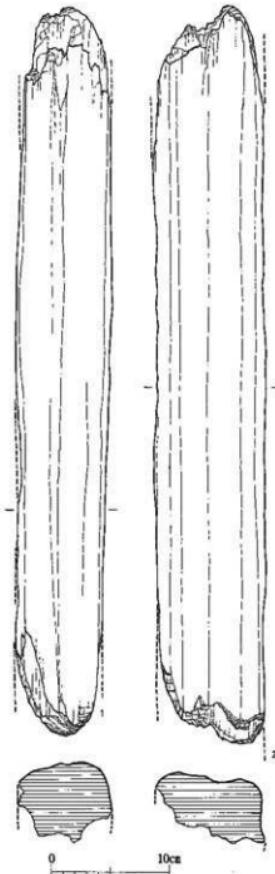


Fig.13 掘立柱遺構関係出土器実測図 (1/4)

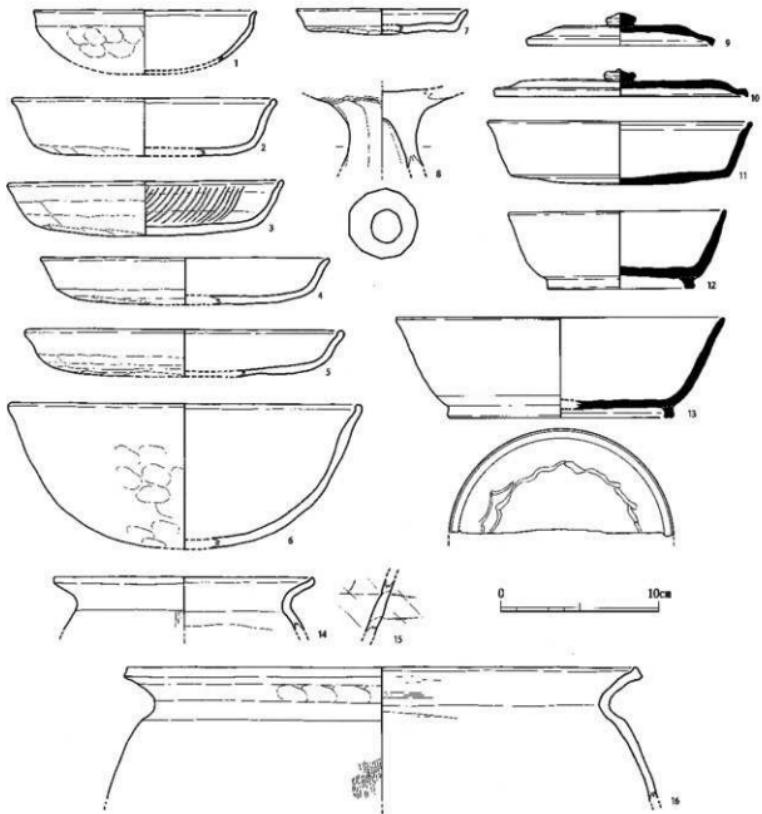


Fig.14 SK099 出土土器実測図 (1/3)

は回転ヘラ削り後に宝珠つまみを貼り付ける。つまみ部径1.9cm。口縁部外面付近に重ね焼き痕が認められる。10は口径16cm、器高1.6cmで宝珠つまみを貼り付ける。内面に重ね焼きの際の融着痕が認められる。いずれも杯Bの蓋と考えられる。

杯（11・12・13） 11は口径16.8cm、器高4.1cmで口縁内外面に回転ナデを施し、口縁部外面には重ね焼痕がある。底部外面はヘラ切り後にナデ調整をする。杯C。12は口径13.8cm、器高5cm、底径9.5cmである。口縁部外面は回転ナデを施し、底部外面は回転ヘラ切り後に高台を貼り付ける。杯B。13は口径20.7cm、器高6.4cmである。底面は回転ヘラ削り後にナデ調整をし、高台を貼り付ける。底部外面にヘラ状工具による波状文様が残る。杯Bである。

土師器

椀（1） 口径14cm、器高3.3cmで口縁端部はやや外傾する。胴部外面には指頭圧痕が残る。

杯（2・3・4） 2は口径16.6cm、器高3.7cmで内外面に横方向のナデをし、底部外面ヘラケズリを施す。杯A。3は口径7.6cm、器高3.5cmで、見込みに正放射状暗文を施す。杯A。4は口径18.4cm、器高3cmで口縁部は横方向のナデを施し、底部外面は軽いケズリの後にナデをする。杯Cである。

皿（5・7）5は口径20cm、器高3cmで底部外面はユビオサエ後に軽いケズリをする。皿A。7は小型品で、口径10.8cm、器高2.1cmである。底部外面には指頭圧痕が認められる。皿Cである。

鉢（6）口径22.4cm、器高9.2cmで、内外面に二次焼成痕がある。鉢B。

高杯（8）基部のみ残存する。側面は11面の面取りをする。

甕（14・16）14は口縁部のみ残存し、口径16.4cmである。二次焼成を受ける。16は口縁部から胴部にかけて残存する。口径32.4cmで、口縁端部はやや肥厚し、頸部外面には指頭圧痕が残る。胴部外面は縱方向のハケ調整をし、内面はナデをする。

製塙土器（15）細片で、胎土は粗く内外面をナデ調整する。

瓦

溶着瓦塊（Pla.6）溶着した状態で7点が出土している。aは長さ21cm、幅24cm、厚さ21cmで、平瓦5枚が溶着したものである。bは長さ21cm、幅23cm、厚さ16cmで、平瓦4枚が溶着したものである。cは長さ20cm、幅22cm、厚さ18cmで、平瓦5枚が溶着したものである。dは長さ24cm、幅43cm、厚さ26cmで、平瓦10枚が溶着したものである。溶着塊中最大のものである。いずれも瓦は溶解し、歪んでいる。

SK104出土遺物（Fig.15, Pla.6）

壺（2・3）2は底部のみ残存し、底径9.6cmである。3は胴部下半から底部にかけて残存し、底径5.0cmである。外面をナデ調整し、一部に黒斑が認められる。

土製品（1）縦5.1cm、横5.9cm、厚さ3.2cmで、胎土はやや粗い。いずれも弥生時代中期前半と考えられる。

SX102出土遺物（Fig.16, Pla.7）

縫釉陶器

椀（1）高台部付近のみ残存し、細片のため皿の可能性もある。内面には二条の陰刻文が残る。時期は9世紀後半～10世紀前半と考えられる。近江産か？

SX008出土遺物（Fig.16）

土師器

皿（2）口縁部のみの細片で、外面には明瞭な指頭圧痕がある。時期は10世紀中頃と考えられる。

SX014出土遺物（Fig.16）

須恵器

椀（5）口縁部から胴部にかけて残存し、口径18.2cmである。内外面に回転ナデをし、外面底部附近に回転ヘラケズリを施す。

SX024出土遺物（Fig.16, Pla.7）

黒色土器

椀（6）底部のみ残存し、底径7.6cmである。

内面には細かなミガキを施し、底部に断面三角形の高台を貼り付ける。時期は10世紀第2四半期と考えられる。

土師器

杯（7）口縁部のみの細片である。外面に指頭圧痕が認められる。杯A。時期は10世紀第2四半期と考えられる。

灰釉陶器

椀（8）内外面に薄く灰釉が施される。時期は10世紀第2四半期と考えられる。

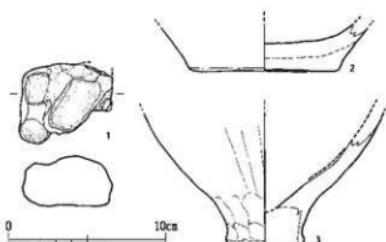


Fig.15 SK104 出土土器実測図 (1/3)

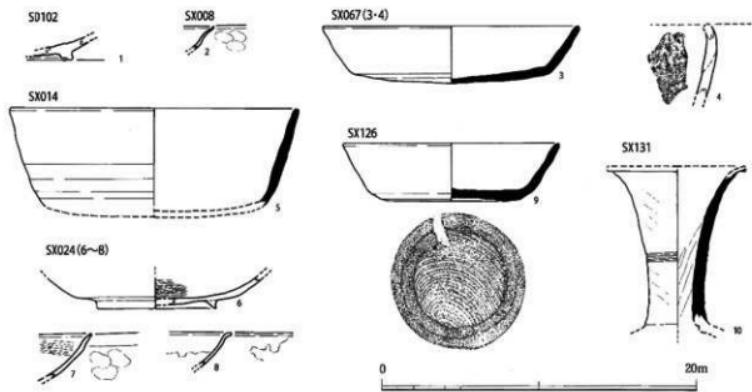


Fig.16 その他の遺構出土土器実測図 (1/3)

SX067出土遺物 (Fig.16、Pla.7)

須恵器

杯 (3) 口径16.2cm、器高3.7cmで、口縁部は回転ナデをし、底部外面はヘラ切り後にナデを施す。杯A。

製塙土器 (4) 口縁部のみの細片で、内面に布目圧痕が残存し、外面はユビオサエ後にナデ調整を施す。

SX126出土遺物 (Fig.16、Pla.7)

須恵器

杯 (9) 口径13.8cm、器高3.7cmで口縁部外面付近には重ね焼痕が認められる。底部端には右回り方向の回転ヘラケズリ痕があり、底面に明瞭な回転糸切り痕が残る。

SX131出土遺物 (Fig.16、Pla.7)

須恵器

水瓶 (10) 口縁部のみ残存するが、口縁端部は欠損する。内面にはシボリ痕が残り、外面には二条の凹線が巡る。

第3章 平城京左京四条三坊十三坪出土木製品の樹種同定

はじめに

平城京左京四条三坊十三坪より出土した下記の木製品3点について樹種同定を行なった。

(1) 試料

No1 磁板 SB100a、 No2 柱根 SB010c、 No3 柱根 SB010f

(2) 同定方法

樹種同定に必要な木口面（横断面）、板目面（接線断面）、柾目面（放射断面）の3断面の切片を安全カミソリを用いて作製し、サフラニンで染色後、水分をエチルアルコール、n-ブチルアルコール、キシレンに順次置換した。その後、非水溶性封入剤を用いて永久プレパラートを作製し、光学顕微鏡で観察した。

(3) 同定結果

各試料の木材組織は顕微鏡写真の通りである。以下に樹種同定結果とその根拠となる木材組織の特徴について記す。樹木分類および植生分布は『原色日本植物図鑑木本編』(II)に従った。同定は木沢直子(木器保存研究室)が行った。

※ 樹木の性質、材の用途、出土事例等については後記の文献を参考とした。

No1 磁板 SB100a

ヒノキ亜科 Subfam. Cupressoideae

ひのき科 (Cupressaceae)

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に点在する。放射組織は単列で2~8細胞高。分野壁孔は1分野に2~4個を確認できるが、木材組織の劣化によりやや不明瞭であるためヒノキ亜科とした。ヒノキ亜科に含まれる樹種にはヒノキ属(ヒノキ、サワラ)、アスナロ属(アスナロ)、クロベ属(クロベ(ネズコ))などが含まれる。このうち木口面における移行の特徴からヒノキ属、アスナロ属の樹種である可能性が高い。

No2 柱根 SB010c

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. Endlicher

ひのき科 (Cupressaceae) ヒノキ属 (Chamaecyparis)

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は狭い。樹脂細胞は早材から晩材への移行付近および晩材部に接線状に配列する。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に2個見られた。放射組織は単列で2~13細胞高である。

分 布：本州(福島県以南の主として太平洋側)、四国、九州(屋久島まで)

樹 形：常緑高木で直幹性。樹高30m、胸高直径1mに達する

用 途：建築、彫刻、家具、器具、船、漆器 等

出土事例：建築材、木簡、祭祀具(斎串、形代)、下駄、箸、紡織具、刀剣鞘、容器(折敷、曲物、桶、底板)等

No3 柱根 SB010f

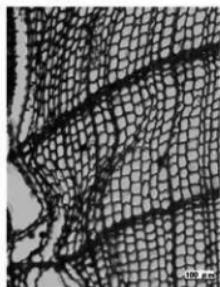
ヒノキ亜科 Subfam. Cupressoideae

ひのき科 (Cupressaceae)

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は狭い。樹脂細胞は早材から晩材への移行部に散在する。分野壁孔はかろうじてヒノキ型を確認することができ、1分野に1~2個見られる。放射組織は単列で2~16細胞高である。木材組織の劣化が顕著であり、分野壁孔がやや不明瞭であったためヒノキ亜科とした。このうち分野壁孔の特徴からヒノキ属、アスナロ属の樹種である可能性が高い。

No.1 硬板 SB100a

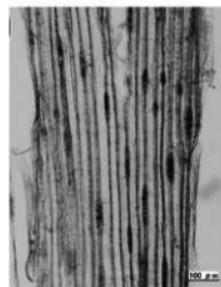
ヒノキ亜科 Subfam. Cupressioideae



木口面



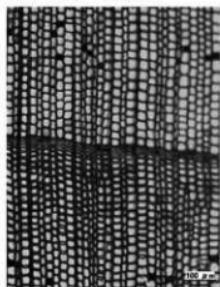
柾目面



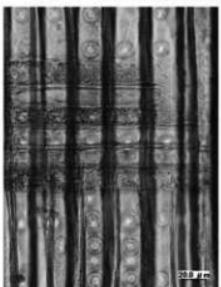
板目面

No.2 柱根 SB010c

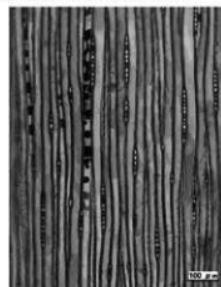
ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. Endlicher



木口面



柾目面



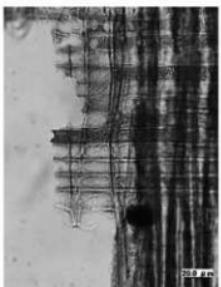
板目面

No.3 柱根 SB010f

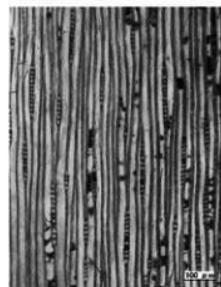
ヒノキ亜科 Subfam. Cupressioideae



木口面



柾目面



板目面

Fig.17 木材組織顕微鏡写真

【参考文献】

島地謙・伊東隆夫 1982『医脱木材组鏡』地球社

北村四郎・村田源 1979『原色日本植物図鑑・木本編2』保育社

島地謙・伊東隆夫 1988『日本の酒樽出土木製品鑑賞』雄山閣

第4章 総 括

【掘立柱建物】

主軸が正方位に近い一群（N-2°～3°-W）が今次の検出建物の大半をしめる。調査範囲が狭いので、建物相互の関係や敷地内での土地利用法等は把握し難いが、類似した振れを有する建物でも切り合い関係があることから、2時期以上の変遷が確認される。

さらに南東隅で検出したSB100は、他とは隔絶した規模の柱振方を有する建物であり、主軸も N-6°-W と西へ大きく振れている。正方位に近い一群とは、SAO50との間に重複関係があるが切り合っておらず、SB100との直接的な関係は明確にしがたい。しかし、SB100の柱がすべて抜き取られていることを思うと、これが先行して存在した可能性を考えるのが妥当だろう。ただ、これに伴う建物は今次の調査範囲内では確認できておらず、その性格や敷地内の様相などは今後の課題として残るものである。

また、出土遺物は各柱穴から若干出土しているものの、年代を絞りこめるような安定した出土状況は認められない。総体として観察すると、8世紀前半から中頃のものと認識できる程度である。したがって、奈良時代の前半から中頃における土地利用の状況を把握したというにとどまるが、建物の密集度は低いながらも少なくとも3期程度の変遷が認められることは重要である。

周辺の調査地の成果とあわせて、今後詳細に検討すべきであろう。

【土坑】

奈良時代のSK099は、主軸を南北にとるが、SB005等の主軸に近く、関連性が想定される。特に詳細な報告を行なわなかったが、SK099以北には類似の長円形を呈する土坑状の遺構が並んでおり、当該敷地における廃棄空間の位置が知られるところである。

また、土坑内から出土した瓦が癒着した資料は、窓壁の一部とみられるものである。調査地の位置から想定すると、南約900mにある大安寺瓦窯跡が注意される。何ゆえにここに残骸がもたらされたのかを解明するのは難しいが、大安寺瓦窯の操業と何らかの関係を示唆する資料となるかも知れない。これも今後の課題として残るものである。

【方形周溝墓】

今回検出した弥生時代の方形周溝墓は、墳丘をまったく確認できない状態で四辺の溝のみの検出にとどまった。しかも、奈良時代の掘立柱建物がこの溝および本来墳丘が存在した部分に重複して建設されていることが確認できた。のことから、少なくとも平城京建設段階にはマウンドは削平されていたものと理解できる。

平城京建設過程において既存の墳墓を破壊していたことは、発掘調査の所見および『統日本紀』の記述からもよく知られている事実である。同様に弥生時代の墳墓についても、マウンドを有するものが邪魔であれば、造都の妨げとみなされて破壊されたことは充分に考えられるところであり、後の平安京でも、造営に際して多くの方形周溝墓が削平されていることが確認されている（財團法人京都市埋蔵文化財研究所 2006）。

今回の所見は、都城造営の際に古墳の破壊だけでなく、どの程度の方形周溝墓がどのように破壊されたかについても、古代の景観論や開発論と関連付けながら検討する必要があることを示唆するものである。今次の調査は、この問題に関して有意義な資料を提示できたものといえよう。

なお、平安時代以降では若干の遺物が見られるものの、明確な遺構は認められなかった。

【参考文献】

財團法人京都市埋蔵文化財研究所 2006 『平安京右京五条三坊十四町跡羽地説明会資料』

関連資料

Fig.18 検出遺構略測図・遺構仮番号配置図 (S=1/200)

Tab.1 遺構番号一覧表

Tab.2 出土遺物一覧表

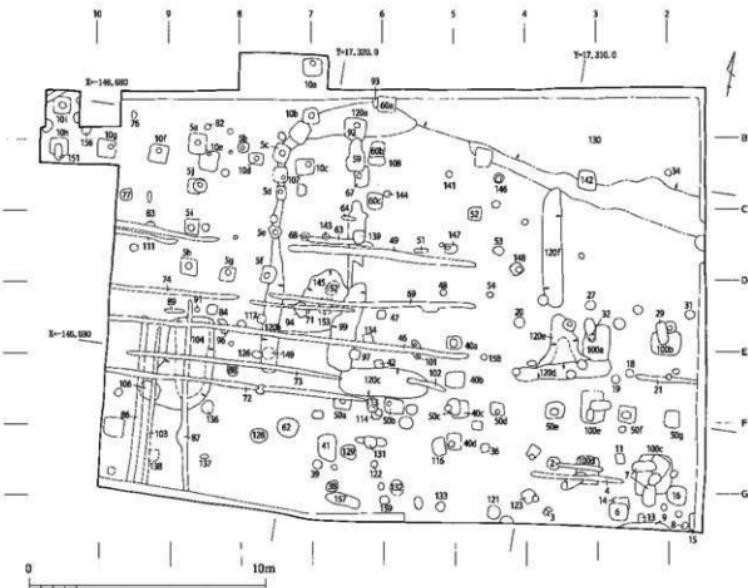


Fig.18 検出遺構略測図・遺構仮番号配置図 (S=1/200)

Tab.1 遺構番号一覧表

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区
1		抜取穴	暗赤褐色土 S-25の抜取穴	G3
2		P	浅茶色壤土、浅い。	G3
3		P		H3
4		小塊	淡灰褐色土塊土	G2・3
5	SB005	遺物	S-181含め、S-5eは削穴、a=5f, b=5g, c=5h, d=5i, e=5g, f=5g, g=5h, h=5i, i=5d, j=161	H1～H8
6		獨立P?		H2
7		抜取穴	浅いV字状（横切も同じ）遺物なし）、S-20抜取穴	H2
8	SX006	小塊		H1
9		断片	暗赤褐色土	H1
10	SB010	獨立塊物	S-61, 63, 79, 78, 109, 154, 156, 125, 105	Cランク
11		P		G2
12		P		G2
13		P		H2
14	SX014	P	柱状あり、灰褐色。土は堆山ブロック多く含む。	H2
15		P		H1
16		P		G1
17	SA050A	獨立P		F1
18		P		F2
19		P		F2
20	SB100	獨立P		F・G2
21		小塊	赤茶土	F2
22	SB100a	獨立P		F2
23	ST1204	区画	明灰褐色土塊土	F3
24	SX024	P	暗赤褐色	F4
25	SB1004	獨立P		F5
26		P	暗赤褐色	F5
27		P		F5
28	SB1004	獨立P		F5
29		抜取穴	暗褐色土、S-127の抜取穴	F5
30		P		E1
31		抜取穴	暗褐色土、S-28の抜取穴	E3
32	SA050A	獨立P		F3
33		P		C2
34	SA050E	獨立P		F2
35	SA050E	獨立P		G4
36		P		F5
37	SA050E	獨立P		G6
38		P		G6
39		P		G6
40	SAB40	柱穴	a～j	E1～E8
41		柱穴	暗土紫褐色	E6
42	ST1204	近隣構		F5
43	ST1204	構	暗褐色シルト	F5・6
44				
45		素組	褐灰色砂質	E4～F9
46		P		E6
47		P		E6
48		P		E6
49		素組	褐灰色砂質	D4～7
50	SA060	獨立構物	S-112, 124, 37, 56, 33, 35, 17	F1～G6
51		素組	褐灰色砂質	B5
52		P		B4
53		P		B4
54		P		B4
55	SA050J	獨立P		F4
56	SA050K	P		G5
57	SA050L	P		G6
58		P		G6
59		P		G6
60	SA060	獨立構物	S-57, 58, 66	B5～C6
61	SB0104	獨立P		C7
62		P		G7
63		素組	褐灰色	B6
64		素組	褐灰色	B6
65	SA060G	獨立P		C6
66	SX067	P		C6
67		P		D7
68		P		E4～7
69		素組	褐灰色	E4～7
70				
71		素組	褐灰色	E6～7
72		素組	褐灰色	F5～7
73		素組	褐灰色	F5～7
74		素組	褐灰色	E5～7
75		P		E9
76		P		C9
77		P		C9
78	SB0106	P	柱構	C9
79	SB0106	獨立P		C9

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区
81	SB0104	廻立P		C7
82		P		B8
83		P		D9
84		P		E8
86		床	茶褐色 小石出土 (伴生)	E~G9
87		床	茶褐色	E~H8
88		P		F8
89		裏側小窓	褐灰色	E8
91		P		E8
92		P		B6
93		P		B6
94		P		E7
96		P		E8
97		P		F6
98	ST120b	区画壁		D~F7
99	SK099	土坑	深10cm程度の石出土 猿物多数 採取穴あり S-29, 25, 22, 28, 127	BP6
SB100				E1~C5
101		P		F5
102	SB102	小窓	褐灰色	F5
103		小窓	茶褐色	E~G9
104	SK104	土坑	黒褐色砂土	BP8
106		P		F9
107		P		C7
108		P		C6
109	SA010g	廻立P		C9
111		小窓	茶褐色	B9
112	SA050a	廻立P		F5
113		P		F6
114		P	下位のP112とあり 080225付遺物はこの下層	F6
116		P	柱頭あり 茶褐色	G6
117		P		E7
118	ST120d	区画壁	方形周溝窓周溝	BP3
119	ST120a	区画壁	方形周溝窓周溝	B5~6
SB120		方形周溝窓	砂土、主柱なし 柱頭残る、柱一明灰色土 壁上茶褐色土	E5~F5
121		P		H4
122		P		C5
123		P		C5
124	SA050b	廻立P		F5
125	SB010b	廻立P		B7
126	SX126	P	東面出入り 茶褐色	F7
127	SB100b	廻立P		E1~2
128		P		G7
129		P		G6
130		窓跡		B1~5
131	SX131	P		G6
132		P		G6
133		P		H5
134		P		E6
135	SB010a	廻立P		A~B7
136		P		F8
137		P		G8
138		P		G8
139		P		G8
141		P		A
142		P		C5
143		P		C5
144		P		D6
145		床	茶良 かなり洗い 褐灰色土 98→145	C6
146		たまり状		E6~7
147		P		C4
148		P		D6
149		P		D4
150	SB010h	廻立P		F7
151		採取穴	S-160の被覆穴	C10
152		P		C10
153		P		E5
154		廻立P		E5
155	SB010j	廻立P		S10
156		P		B10
157		P		B10
158		P		F~H8
159		P		F4
160		P		H5~E
161	SB005j	廻立P		C8

Tab.2 出土遺物一覧表

S-1 土師器(古代) 須恵器(古代)	細片	SX008 土師器(古代) 須恵器(古代)	皿A・細片	S-26 土師器(古代) 須恵器(古代) 黒色土器	細片 細片 A柄
S-2 土師器(古代) 須恵器(古代)	碗A・細片 杯・杯	S-9 土師器(古代)	細片	S-27 土師器(古代) 須恵器(古代)	細片 細片
S-3 土師器(古代)	碗・細片	須恵器(古代)	杯・片	SB100a(掘方) 土師器(古代)	細片
S-4 土師器(古代)	細片	その他	石	須恵器(古代)	細片
SB005a(掘方) 土師器(古代)	細片	S-12 土師器(古代)	細片	木製品	柱
SB005a(柱穴) 土師器(古代)	細片	S-13 土師器(古代)	細片	SB100b(抜き取り) 土師器(古代)	細片
SB005a 土師器(古代)	杯・細片	SX014 土師器(古代)	皿	S-31 土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	杯	須恵器(古代)	碗A・壺・杯蓋	瓦器	細片
SB005c 土師器(古代)	皿・壺・片	金属製品	不明鉄製品	SB100a(抜き取り) 須恵器(古代)	杯
須恵器(古代)	杯	S-15 土師器(古代)	細片	SA050e(掘方) 須恵器(古代)	細片
SB005d 土師器(古代)	細片	須恵器(古代)	細片	SA050e(柱穴) 須恵器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片	須恵器(古代)	細片	SA050f 土師器(古代)	細片
SB005e 土師器(古代)	細片	S-16 土師器(古代)	細片	S-34 土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	杯・壺・蓋・細片	須恵器(古代)	細片	須恵器(古代)	細片
瓦類		瓦類	平瓦	SA050f 土師器(古代)	細片
SB005f 土師器(古代)	壺・細片	S-18 土師器(古代)	細片	S-36 須恵器(古代)	壺
須恵器(古代)	杯蓋	須恵器(古代)	細片	SA050g 弥生土器	細片
SB005g 土師器(古代)	細片	S-19 土師器(古代)	細片	S-38 土師器(古代)	壺B・壺・細片
SB005h 土師器(古代)	壺	土師器(古代)	細片	須恵器(古代)	細片
須恵器(古代)	壺	SB100c(掘方) 土師器(古代)	細片	S-39 土師器(古代)	細片
SB005i 土師器(古代)	壺・皿	S-21 土師器(古代)	細片	SA040a 土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片	SB100e 土師器(古代)	細片	S-41 土師器(古代)	細片
SB005i(柱穴) 土師器(古代)	細片	ST120d 弥生土器	細片	須恵器(古代)	細片
SB005i(柱穴) 土師器(古代)	細片	SX024 土師器(古代)	皿・細片	S-42 土師器(中世)	細片
SB005i(柱穴) 土師器(古代)	細片	灰釉陶器	皿	ST120e 土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片	黒色土器	A柄	SB100d(掘方) 土師器(古代)	細片
瓦類		木製品	柱	ST120c 土師器(古代)	細片
平瓦				石器	サヌカイトチップ

S-46	土師器(古代) 細片 須恵器(古代) 梗・杯・壺 瓦類 平瓦	SX067	土師器(中世) 製塙土器 須恵器(古代) 杯・壺・蓋	S-88	土師器(古代) 細片 須恵器(古代) 粗片
S-47	土師器(古代) 細片 瓦器 梗	S-88	土師器(古代) 細片 須恵器(古代) 細片	S-89	土師器(古代) 細片 須恵器(古代) 粗片
S-48	土師器(古代) 細片 須恵器(古代)	S-89	土師器(古代) 細片 須恵器(古代) 蒜・細片 瓦器 梗	S-91	土師器(古代) 細片
S-49	土師器(古代) 細片 須恵器(古代) 細片 瓦類 平瓦	S-71	土師器(古代) 細片 須恵器(古代) 細片	S-92	土師器(古代) 細片 須恵器(古代) 壺・細片
S-51	土師器(古代) 細片	S-72	土師器(古代) 細片 須恵器(古代) 細片	S-93	土師器(古代) 細片 須恵器(古代) 細片
S-52	土師器(古代) 細片	S-73	土師器(古代) 細片	S-94	土師器(古代) 細片
S-53	土師器(古代) 細片	S-74	土師器(古代) 細片	S-96	土師器(古代) 細片
S-54	土師器(古代) 細片	S-76	土師器(古代) 細片	S-97	土師器(古代) 細片 須恵器(古代) 杯蓋・杯身・細片
SA050d	土師器(古代) 細片	S-77	土師器(古代) 細片	ST120b	
SA060a	土師器(古代) 細片 須恵器(古代) 杯	SB010f	土師器(古代) 細片 須恵器(古代) 細片 木製品 柱	須恵器(古代) 紗・細片	SK099
SA060b	弥生土器 細片 土師器(古代) 壺 須恵器(古代) 蓋	SB010e	土師器(古代) 細片 須恵器(古代) 細片	土師器(古代) 鈎・皿A・甕A・高杯 A・製塙土器 須恵器(古代) 杯A・杯B・蓋A 瓦類 平窓壁	S-101
S-59	土師器(古代) 蓋・杯A 須恵器(古代) 蓋・杯	SB010d	土師器(古代) 細片 須恵器(古代) 杯 瓦類 平瓦・丸瓦	土師器(古代) 細片	SD102
SB010c	土師器(古代) 細片 須恵器(古代) 細片 木製品 柱・繩片	S-82	土師器(古代) 細片	土師器(古代) 細片	SD102
S-82	土師器(古代) 細片 須恵器(古代) 細片	S-83	土師器(古代) 細片	須恵器(古代) 細片	SK104
S-63	土師器(古代) 細片 須恵器(古代) 細片	S-84	土師器(古代) 皿・細片 須恵器(古代) 蓋・細片	瓦類 平瓦	弥生土器 蓋
S-64	土師器(中世) 細片 須恵器(古代) 細片	S-86	土師器(古代) 細片 須恵器(古代) 細片	土師器(古代) 細片	土師器(古代) 細片
SA060c	土師器(古代) 蓋・細片	S-87	土師器(古代) 細片 須恵器(古代) 細片 黑色土器 A細片	S-106	土師器(古代) 細片
				S-107	土師器(古代) 細片
				S-108	土師器(古代) 細片

S-010g 土師器(古代) 須恵器(古代)	細片	S-129 土師器(古代) 須恵器(古代)	杯A・細片 杯蓋・縁	S-148 土師器(古代) 須恵器(古代)	縁・細片
S-010g(柱穴) 土師器(古代)	[細片]	S-130 その他	鉄鉱石	S-010h(掘方) 土師器(古代)	縁片
S-111 土師器(古代) 須恵器(古代)	細片	S-131 土師器(古代) 須恵器(古代)	縁片 壺B・杯B・杯蓋	S-010h(抜き取り) 土師器(古代)	片
SA050a 須恵器(古代)	杯・盤	S-132 土師器(古代)	縁片	須恵器(古代)	縁片
S-113 須恵器(古代)	杯身・杯蓋	S-133 土師器(古代)	縁片	S-153 土師器(古代)	縁片
S-114 土師器(古代) 須恵器(古代)	皿・細片	須恵器(古代)	縁片	須恵器(古代)	縁片
S-114(柱穴) 土師器(古代)	細片	S-134 土師器(古代)	縁片	S-010i 土師器(古代)	縁片
須恵器(古代)	細片	須恵器(古代)	縁片	S-156 土師器(古代)	縁片
黑色土器	A細片	瓦類	平瓦	S-157 土師器(古代)	縁片
S-116 土師器(古代)	[細片]	S-136 土師器(古代)	瓶・縁片	S-158 土師器(古代)	縁片
須恵器(古代)	縁片	須恵器(古代)	縁片	土師器(古代)	縁片
S-117 須恵器(古代)	細片	S-137 土師器(古代)	縁片	S-159 土師器(古代)	縁片
ST120d 土師器(古代)	[細片]	黑色土器	A細片	ST120a 土師器(古代)	[細片]
瓦類	軒平瓦・軒丸瓦	S-138 土師器(古代)	縁片	S-005i 土師器(古代)	縁片
S-121 土師器(古代) 須恵器(古代)	杯A・縁片	須恵器(古代)	縁・壺・杯蓋	包含層	
須恵器(古代)	細片	瓦類	軒平瓦	土師器(古代)	杯A・杯B・縁片
金屬製品	不明鉄製品	金属製品	不明鉄製品	須恵器(古代)	杯・壺・杯蓋・縁片
S-141 土師器(古代)	[細片]	S-142 土師器(古代)	[細片]	石器	サヌカイトップ
S-122 土師器(古代)	[細片]	土師器(古代)	[細片]	瓦類	平瓦
S-123 土師器(古代)	[細片]	S-143 土師器(古代)	[細片]	土壤	
SA050b(掘方) 須恵器(古代)	[杯]	土師器(古代)	[細片]	土師器(古代)	縁・縁片
SA050b 須恵器(古代)	縁・縁片	土師器(古代)	[細片]	須恵器(古代)	杯・壺・縁片
SX126 土師器(古代)	細片	國產陶器	壺(信來)	瓦類	平瓦
須恵器(古代)	杯A・壺・縁片	須恵器(古代)	縁	金屬製品	不明鉄製品
S-144 土師器(古代)	[縁片]	S-145 土師器(古代)	縁片	瓦類	軒平瓦
SA050b 須恵器(古代)	[杯]	土師器(古代)	[縁片]		
S-146 土師器(古代)	縁片	土師器(古代)	縁片		
須恵器(古代)	縁片	須恵器(古代)	杯身・杯蓋・縁		
S-147 土師器(古代)	[縁片]	S-148 土師器(古代)	[縁片]		
S-128 土師器(古代)	壺・縁片	土師器(古代)	[縁片]		

写 真 図 版

(H.例)

遺物写真の右下に記す番号は、
Fig.番号—遺物番号
と理解されたい。

PL.1



調査区全景（南から）



調査区全景（西から）